

焼香について



●Answer
帰依 龍照(きえりゅうじょう)
沖縄市・ゴザ山球陽寺住職

Q

焼香について質問

後生のお正月である「ジユールクニチー」を家族みんなで敬います。私も嫁先の横浜から沖縄へ帰省するのが毎年の楽しみです。祖母は沖縄のお線香(ヒラウコー)で、母は内地のお線香で焼香しますが、兄はある宗教を信仰していて、絶対、焼香をしてはいけないことになっているそうです。このことで、せっかくの年中行事がいつもトラブルになります。家族みなが仲良くなれる、いい解決策はありませんか?

(神奈川県・Tさん)

A Tさん、それはご心配ですね。あらためて焼香について、一緒に考えてみましょう。

焼香とは、香を焼くと書きますが、香を焚(た)くという所作から、「焚香(ふんこう)」と書くこともあります。焼香には、仏・菩薩に対する信仰である「献香(けんこう)」香を捧げる」という意味と、自分自身に対する戒心(かいしん)である、「清淨香(しきよじょうこう)」香で清める」というふたつの意味があります。

沖縄では、ウヤファーフジ(ご先祖)に対しての供養である、「仏前香(ぶつぜんこう)」香で敬う」といってます。その昔、お釈迦さまの弟子が、自分の故郷にお堂を建てたそうです。その弟子は、お堂にお釈迦さまを案内して尊い説法を聞かせて欲しいと、日夜、想いを込めて香を焚いたそうです。不思議なことに、その香の煙は、遠く離れたお釈迦さまのもとへ天蓋(てんがい)絹傘(きぬがさ)となつて届きました。弟子の熱心な想いを悟られたお釈迦さまは、お堂に馳せ参じて、しばしの面談を果たし、ありがたい説法をお話しになられたとのことです。

このことから、仏式では、慕い敬う人(故人も含む)との再会を果たしたいといふ畏敬の念の表れから、焼香を行うようになつたといわれています。父や姉、兄を亡くしている私自身、このエピソードには、いつも優しく聞いてみてはいかがでしょうか?

焼香の作法は、宗派や寺院、地域によって異なります。一例を挙げると、抹香(まつこう)粉末状のお香

を建てる(沖縄の多くの場合)や、線香を折つて寝かせる(浄土真宗本願寺派など)とされています。また線香で焼香する場合は、1本を立てる(沖縄の多くの場合)や、線香を折つて寝かせる(浄土真宗本願寺派など)というように、それぞれの作法があります。

もちろん、自分自身の宗派や寺院、地域の作法を知ることは大切ですが、自らの作法を他人に強要するものではないことに留意する必要もあります。家族の方々が、それぞれ異なるスタイルで焼香を行つても差し支えないという根拠は、ここにあるといわれています。

ご心配されているお兄さんのことですが、信仰する宗教が禁じて

2回(真宗大谷派など)、1回(浄土真宗本願寺派など)とされています。またインドには焼香にまつわるエピソードが残っています。その昔、お釈迦さまの弟子が、自分の故郷にお堂を建てたことをアーデバイスしてみるのも一案ですし、お兄さんの立場を理解してあげることも、ジユールクニチー(十六日祭)の敬いにつながるのではないか? いでしようか?

Tさん、ご家族それぞれ

焼香の作法は異なりますが、お仏壇の前に一同が集まる微笑ましいひとときをお持ちであることを、心からうらやましく思います。今年のジユールクニチー(新暦3月6日)が、ありがたい年中行事になることをお感じ申し上げます。



イラスト: 帰依ひろ子